

学校へのポジティブな思いを高めるためのアプローチ ：「School connectedness」研究に着目して

黒澤 あゆみ 身延山大学 仏教学部
古志 めぐみ お茶の水女子大学 人間発達教育科学研究所
青木 紀久代 お茶の水女子大学

要約

学校メンタルヘルス支援において、学校に対する子どものポジティブな思いを取り上げていくことが重要な課題となっている。本稿では、学校へのポジティブな思いとして海外で研究が進む「School connectedness」に着目し、その概念のとらえられ方とそれを高めるためのアプローチについて明らかにすることとした。教育関係資料のデータベースである ERIC を使用して抽出された論文を 5 つの視点で整理したところ、「School connectedness」は、学校における活動へのコミットとアタッチメント、そしてサポートの認知の 3 領域に集約できることが推察された。また、メンタルヘルス支援において「School connectedness」は相乗効果を持つこと、入学初期に「School connectedness」を高めるプログラムを導入することや、リスクのある生徒に早めに働きかけることなどが、その後のメンタルヘルス維持に重要であることが示唆された。学校における異年齢活動が有効である可能性も見出された。

キー・ワード：学校へのポジティブな思い、School connectedness、学校メンタルヘルス支援

I 問題と目的

1. 学校におけるメンタルヘルス支援

学校には、子どもや家庭、地域の様々な課題が持ち込まれている。発達障害の子どもやうつ病など精神疾患に罹患する子どもの増加、いじめや不登校の問題（文部科学省, 2017）、さらに、貧困状態にある子どもも増えているという（内閣府, 2014）。こうした中で、子どものメンタルヘルス上の課題に対応するために、日本では全国にスクールカウンセラー（以下、SC と略記）の配置が行われている。この 20 年ほどで全国で SC の活動は定着し、学校臨床における様々な実践が積み重なってきている。

SC 導入当初は、支援の必要な児童・生徒への個別面接、いわゆる三次的援助サービス（石隈, 1999）が中心であった。しかし、近年ではむしろ、すべての子どもに対する一次的援助サービスも広まり、心理教育プログラムなどが行われている学校も増えている（家近, 2017 など）。さらに、文部科学省（2015）が「チームとしての学校」を打ち出し、SC もそのチームの一員として位置づけられることとなったことで、より手厚い援助サービスが進められている。

こうした背景には、問題対応型ではなく、予防的介入へのシフトチェンジや、健康心理学、ポジティブ心理学の広まりがある。問題が生じる前に環境を整える、すなわち、子どもたちが日常的に

健康に、心地よく過ごせる環境づくりを行うということである。複雑に絡み合った課題を一つ一つ順に解消しては十分な援助は行き届かない。そのため、起きている問題の原因に目を向けて対応するとともに、子どもたちの学校に行きたいという気持ちや、学校にいて楽しいと思う気持ちのような、学校へのポジティブな思いにも焦点を当てることが求められる。本稿では、こうした学校に対する子どもたちのポジティブな思いを、「学校との結びつき」ととらえる。

2. 学校との結びつきへの着目

これまで国内では、こうした学校に対するポジティブな思いは「登校意欲」(門田・吉田・大東・青木, 2012) や「学校魅力」(久能・長谷川, 2001) という言葉で検討されてきている。しかし、「学校に行きたくないと思ったことがある」という項目に対して「ほとんどないない」と回答した場合に「登校意欲」があるとするなど、ネガティブな思いの否定を肯定ととらえているに過ぎない。

一方、海外では、学校との結びつきを「School connectedness」と表し、青少年の心身の健康に良好な影響を与える要因として示されてきている (McNeely, Nonnemaker & Blum, 2002 など)。

「School connectedness」は、「positive orientation to school 学校への肯定的な気持ち」、「School attachment 学校への愛着」、「School bonding 学校への絆」、「School Climate 学校環境」、「School connection 学校とのつながり」、「School context 学校の文脈」、「School Engagement 学校への積極的関与」、「Student Engagement 生徒の積極的関与」、「School Involvement 学校への参加」、「Student identification with school 学校との一体感」といった言葉で表されることもあり (Libbey, 2004), これまでに多くの研究が行われてきている。

そこで、本稿ではこのことに着目し、「School connectedness」に関する近年の研究において、

学校との結びつきがどのようにとらえられており、それを高めるためにどのようなアプローチが行われているのか、概観することとした。これにより、日本の今後の学校臨床における示唆を得たい。

II 方法

2017年6月に米国教育省の教育資源情報センター (Educational Resources Information Center; ERIC) を利用して、文献の検索を行った。ERICは、教育関係資料のデータベースであり、「School connectedness」という学校に関連する文献を抽出するのに適していると考えた。

検索は、「School connectedness」をキーワードとし、「Journal Articles」の「Peer review only」に絞った。その結果、434本が抽出された。続いて、タイトルまたはアブストラクトに「School connectedness」というワードが含まれているもののみを抽出した。すなわち、「Social connectedness」「Community connectedness」「Family connectedness」や、「Connectedness」が単独で使用されている場合などは除いた。さらに、Ramsey, Spira, Parisi, & Rebok (2016) が School climate (学校風土) のとらえ方が回答者によって異なることを明らかにしたように、「School connectedness」も回答者によってとらえ方が異なると考えられる。すなわち、教師から見た子どもの「School connectedness」と、子ども自身がとらえる「School connectedness」は異なるということである。本稿では児童・生徒にとって学校との結びつきがどのようにとらえられているのかを明らかにしたいため、レビューや総説と、回答者に小・中・高校生が含まれている場合のみに絞った。最終的に127本が抽出され、これらについて概観することとした。

III 結果と考察

1. 抽出論文の特徴

抽出された127本の出版年による論文数の推移

をまとめたものが図1である。

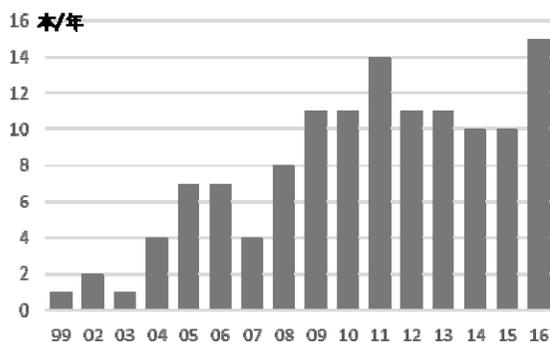


図1 論文数の推移

最初に「School connectedness」という言葉が用いられたのは1999年であり、2000年代に入ってから多少の増減はしているものの、少しずつ増加してきていることが読み取れる。2009年頃からは年10本を超えており、2000年以降2009年までの8年間と、2010年から2016年の7年間の平均を比較すると、前者が5.5本、後者が11.7本と2倍以上の増加が見られた。海外でも関心が高まってきていると考えられる。

2. 「School connectedness」研究の背景

「School connectedness」が1990年代末から取り上げられるようになってきた背景には、1994年からアメリカで行われているAdd Healthという縦断研究プロジェクトの影響がある。Add Healthとは、The National Longitudinal Study of Adolescent to Adult Healthの略称であり、家族、近所、地域、学校、友人関係、仲間集団、恋愛関係に関する文脈のデータと、回答者の社会的、経済的、心理的、身体的ウェルビーイングに関する縦断調査データを結合し、青年期の社会的環境と行動が、若い成人期の健康と成果にどう関連するかを研究するプロジェクトである(Harris et al., 2009)。最初に「School connectedness」という言葉を用いたJacobson & Rowe (1999)もAdd

Healthのデータを用いている。Add Healthの「School connectedness」の尺度は8項目からなり、具体的には、「先生はあなたを気にかけてくれる」「学校の人たちに親近感を感じる」「先生は生徒に平等に接する」「学校にいると安心する」などの項目から構成されている。

Add Healthのデータを用い、「School connectedness」の様々な関連要因を検討したものが、McNeely, Nonnemaker & Blum (2002)らである。この中では、学校への生徒の結びつきを増す方法を同定するために、「School connectedness」と学校環境の関連を検討している。「School connectedness」は「この学校の人に親しみを感じる」「この学校の一員であると感じる」「この学校にいると幸せだ」「この学校の先生は生徒に公平に接する」「学校にいて安心する」の5項目で構成されていた。

さらに、WHOも1982年よりHealth Behaviour in School Children (HBSC)という、学齢期の子どもの健康行動に関する国際比較調査を行っている。この調査は、子どものライフスタイルと健康行動、若者の生活の文脈について理解を深めるために行われたものであった(Aarø, Wold, Kannas, & Rimpelä, 1986)。Thompson, Iachan, Overpeck, Ross, & Gross (2006)は、HBSCの中で、「School connectedness」に着目し、そこには、学校が好きであるということlinking schoolと、教師や仲間との肯定的な関係が含まれた。具体的には、「この学校にいると、安心できる」「クラスに元気のない人がいると、誰かが声をかける」「クラスの人たちと一緒にいると楽しい」「このクラスのほとんどの人は親切で、手助けしてくれる」「この学校の人、私のことをそのまま受け入れてくれる」の5項目に加え、「現在通っている学校について、あなたはどのように感じていますか」について、「まったく好きでない〜とても好き」から4件法であてはまるものを選んで得点化している。

3. 「School connectedness」のとりえ方

このように、同じ「School connectedness」という言葉でさえも様々な項目でとらえられてきた。Libbey (2004)によると、「School connectedness」として検討されてきている様々な概念は9つの観点から整理ができるという。その観点とは、① Academic engagement 学習への意欲、② Belonging 所属感、③ Discipline/fairness 公平性、④ Extracurricular activities 課外活動、⑤ Likes school 学校が好きか、⑥ Student voice 生徒の声を聴いてくれるか、⑦ Peer relations 仲間関係、⑧ Teacher support 教師サポート、⑨ Safety 安心感、である。

この観点を基に、用いられている尺度について見てみると、まず HBSC の項目を用いたものや Add Health の項目を用いたもの (Mann, Smith, & Kristjansson, 2015 ; Neely, Walton, & Stephens, 2016)、さらに、これをアレンジしたもの (Nearchou, Stogiannidou, & Kiosseoglou, 2014) など、大規模プロジェクトで作成されてきたものが挙げられる。これらの中で「School connectedness」は、⑤学校が好きという気持ちや⑧教師サポート、学校における②所属感や⑨安心感などで示される。そのほかには、学校における④課外活動や⑥生徒の声に焦点を当てた Psychological Sense of School Membership Scale (PSSM ; Goodenow, 1993) を用いているものが多い (Shochet & Smith, 2014 ; Connolly et al., 2015 ; Van Gundy et al., 2016)。PSSM の項目は、「私はこの学校の一員だと心から感じる」「私はこの学校の活動にたくさん参加している」「この他の生徒は私らしい私を好きである」など 18 項目から成り、信頼性・妥当性ともに確認されている。また、②所属感を重視し、生徒の主観的幸福尺度 (SSWQ) の下位尺度として 4 項目でとらえているものも見られる (Renshaw, 2015 ; Renshaw, Long, & Cook, 2015)。SSWQ

における「School connectedness」の具体的な項目は「私はこの学校に所属していると感じる」「この学校で私らしく振舞える」「この学校の人は私をケアしてくれる」「私はこの学校を誇りに思う」であり、妥当性も確認されている尺度である。さらに、学校風土の下位領域に位置づけて用いているものが、Bradshaw, Waasdorp, & Debnam (2014) や La Salle, Parris, & Morin (2016), Aldridge, Fraser, & Fozdar (2016), Martinez, Coker, & McMahan (2016) である。「School connectedness」は積極的関与 (engagement) 領域に含まれると考えられており、①学習への意欲に焦点が当てられていると考えられる。より広く結びつきをとらえた Coyne-Foresi (2015) は、Karcher's (2011) の Hemingway Measures of Pre-Adolescent and Adolescent Connectedness を用いており、「School connectedness」は若者が感じる「connectedness」の一側面に位置づけられている。こうした中で、Chung-Do, Goebert, Chang, & Hamagani (2015) は包括的な尺度作成を試みている。その結果、学校参加 School involvement, 学業へのモチベーション Academic motivation, 学校への愛着 School attachment, 教師のサポート Teacher support, 友人関係 Peer relations の 15 項目 5 因子が抽出されたが、この尺度も Libbey (2004) でいう①学習への意欲、⑤学校が好きか、⑦仲間関係、⑧教師サポートを含みこむものととらえられる。

このように、「School connectedness」は幅広い概念であり、同じ言葉を用いても焦点を当てるポイントが異なる。しかし、いずれの尺度にも少なからず含みこまれている要素は次の3つに集約できるだろう。1つは、Libbey (2004) のとらえる①学習への意欲や④課外活動といった【学校の活動へのコミットメント】、2つ目は、②所属感、⑤学校が好きかどうか、⑨安心感に表現されるアタッチメント】、そして3つ目が⑦仲間関係、⑧教師サポートをどう受け取るかという【サポート

への認知】である。③公平性はサポートの認知に、⑥生徒の声はコミットメントに含まれ得るだろう。

【サポートの認知】としたのは、実際に受けたサポートではなく、例えば、子ども自身が「手助けしてくれる」「ケアしてくれる」と思っているかどうかということが項目として含みこまれているからである。本稿では、「School connectedness」はこの3側面ととらえられるものとする。そのため、学校との結びつきを強め、学校に対してポジティブな気持ちを持つためには、コミットメント、アタッチメント、サポート認知のいずれかに働きかける必要があると推察される。

4. 「School connectedness」の関連要因

「School connectedness」については、これまで青少年の心身の健康との関連の中で検討されてきている。特に、「School connectedness」が独立変数となり、様々な健康指標に正の影響を与えるということは複数の研究で検討されてきている (Furlong, Sharkey, Quirk, & Dowdy, 2011 ; Langille, Rasic, Kisely, Flowerdew, & Cobbett, 2012 など)。そこで、学校との結びつきを高めるためのアプローチを探るという目的に照らし、主に従属変数としての「School connectedness」に着目して、1) リスク要因の抑制, 2) ポジティブな側面の促進, 3) アプローチの時期, 4) アプローチの対象, 5) プログラムの効果の5つの視点から整理する。

1) リスク要因の抑制

青年のメンタルヘルスの問題や危険行動との関連はこれまでも検討されており、特に抑うつ症状に影響があるといわれてきている (Millings, Buck, Montgomery, Spears, & Stallard, 2012 ; Loukas & Pasch, 2013 など)。こうした関連性について検討したものとして、例えば、人生早期の対人的トラウマ暴露後の影響として、学校との結びつきが強いことが抑うつ症状の減少と関連しているという Scherdtfefer Gallus, Shreffler,

Merten, & Cox Jr. (2015) の研究がある。これは、青年期のうつへの介入は、学校との結びつきを高めることに焦点を当てることが重要であるということを指摘した Millings et al. (2012) を支持するものであり、トラウマ暴露という過去の経験からの回復においても、学校との結びつきが機能する可能性を示唆している。先に述べた通り、学校との結びつきは、アタッチメントに表現される、愛着関係を内包する側面も有している。そのため、早期の対人的トラウマ暴露のような、愛着関係に影響をもたらす問題に対しても有効性を発揮するものと考えられる。

また、学校との結びつきを介して、学級風土が抑うつ症状に影響を与えているという、媒介変数としての役割も述べられている (Shochet & Smith, 2014)。これまでも、学級風土が抑うつに関連するとされてきていたが、これにより学校との結びつきが媒介するということが明らかとなった。学級風土という環境面を良好にしていくとともに、個人が学校や学級に結びつきを感じているかどうかにも目を向けることで、メンタルヘルスの改善を図っていくことが可能であると言えよう。より予防的に、学校との結びつきを高めることで学問的成功への恐怖 (Fear of academic success) を軽減することも重要となる (Gore et al., 2016)。学問的成功の恐怖は最終的には社会的排除の恐怖につながるものであり、問題が大きくなる手前の働きかけが求められる。厚生労働省 (2012) も、社会的排除への支援として、早期発見、子どもが相談しやすい環境の整備などを挙げており、ここに学校との結びつきの維持・向上が含まれるということになる。コミットメントにかかわる部分である。

さらに、学校との結びつきは、性的危険行動の抑止要因ともなり (Langille et al., 2014)、攻撃行動、物質乱用、自傷といった危険行動の累積が、学校との結びつきを含む、生徒の主観的幸福尺度 (Student Subjective Wellbeing Questionnaire ;

SSWQ)と関連していることも明らかとなっている(Renshaw, 2015)。リスク要因の抑制という点においては、性差があることが複数の研究で指摘されており、これらの危険行動においても同様である。一般に、学校との結びつきは女子で高い傾向があるが、Langille et al. (2014)によると、性的危険行動との関係においては、女子よりも男子にとって学校との結びつきが重要である可能性があるという。すなわち、女子では学校との結びつきの高低にかかわらず性的危険行動のリスクは生じ得るが、男子においては、学校との結びつきが低い生徒に性的危険行動のリスクが高いということである。この調査は10-12年生を対象にしているが、より低い年代(6年生)を対象にしたLoukas, Cance, & Batanova (2016)は、中学生期にわたって高まる外的問題の程度が結びつきの低さと関連し、中学入学時の適応の程度によって、男子の結びつきの減少率がより遅くなることを指摘している。学校との結びつきを高めることで外的問題のリスクを低減するとともに、メンタルヘルスが維持されていれば、学校との結びつきも低くなりにくいということである。

また、Chapman, Buckley, & Sheehan (2013)は、愛着理論、社会的抑制理論、社会的発達モデルを背景として、7つの異なる学校ベースのプログラムについてレビューを行っている。その中では、学校との結びつきの増加による危険関連行動への影響を仮定して検定する媒介分析はほとんどなく、学校の結びつきの定義や測度が必ずしも一貫しているわけではないこと、また、変化に至るまでに何が一番効果があるのか、あるいは、すべての要因が必要なものなのかについての課題も残っていることを指摘している。

2) ポジティブな側面の促進

リスク要因の抑制とともに、ポジティブな要因を促進したり、予測したりする面も明らかにされている。様々な個人内外の資源の中でも、学校との結びつきとの関連が大きいのが学業達成である

(Renshaw, 2015)。また、自己肯定感、特に学業的自己有能感との関連も大きい(Booth & Gerard, 2014)。学校は学ぶ場であり、学業は大きな割合を占めるものである。そのため、学業面における達成や成功は子どもの適応に大きく影響を与えうる。学校との結びつきは、学校が好き、学校にいて安心するという感覚を含み、学業での成功は学校への肯定的感覚につながり、そのことは自己肯定感をも高める。さらに、課外活動に参加する学生にも、社会情緒的安心感、大人のサポート、生徒サポート、そして学校との結びつきについてより好ましい認識があるという(Martinez, Coker, & McMahan, 2016)。先に述べたが、学校で提供している活動や、その風土へコミットすることは、学校との結びつきをより強めるものと考えられる。これについて、Gowing & Jackson (2016)は、学校場面で子どもたちが利用できる関係的であり、活動を基盤とした、学業的な機会を通じて、学校とのつながりが経験されることを指摘している。

こうした学業面での影響とともに、心理的適応との関連も指摘される。学校における様々な肯定的要因が直接的、間接的に心理的適応に影響を与えるが、学校との結びつきは生徒のウェルビーイングに直接的に影響することが明らかとなっている(Aldridge, Fraser, & Fozdar, 2016)。また、安全で支持的な環境、生徒の積極的関与、レジリエンス、自己決定を強調した学校ベースのメンタルヘルスプログラムに着目したMurnaghan, Morrison, Laurence, & Bell (2014)は、学校との結びつきが心理的適応や、自律性、有能感、関係性の予測因となっていることを示した。学校との結びつきを高めることは、子どもの適応やメンタルヘルスの維持・促進といったポジティブな側面を高めるために不可欠であると言えよう。

3) アプローチの時期

学校との結びつきへのアプローチは、特に中学校入学時が重要な時期となる(Waters, Cross, & Shaw, 2010)。Booth, Gerard (2014)によると、

最初は学校に対してポジティブな感情で入学するが、学年末までにこれは低下するという。また、学年で低下していくのみならず、中学生期にわたって学校との結びつきは下がっていく (Lukas, Cance, & Batanova, 2016)。Lukas et al. (2016) は、入学当初に適応の問題が生じることが低い学校との結びつきと関連することも指摘している。そして、卒業試験の通過といった教育的成果にも学校との結びつきは影響し (Jimerson, Patterson, Stein, & Babcock, 2016)、大学準備 (Bersamin, Garbers, Gaarde, & Santelli, 2016) やその後の就職見通し (Van Gundy et al., 2016) とも関連するという。こうした予後に関する研究は 2016 年に多く見られ、より長期的なスパンで学校との結びつきの影響を見ていこうとする動きがあると考えられる。

4) アプローチの対象

こうした長期的なとらえ方について研究が進む一方で、次第に学校との結びつきが低くなりやすい、あるいは、維持しにくい対象が精査されてきている。例えば、学校との結びつきを、生徒のメンタルヘルス機能に影響する学校風土に対する認識の重要な一部としてとらえた La Salle, Parris, Morin, & Meyers (2016) は、いじめ被害を経験している生徒は学校との結びつきが低いことを示した。中でも、いじめにあっている生徒で大人にそのことを打ち明けられない生徒はより学校との結びつきが低くなり、学校との結びつきが低いとより打ち明けられなくなるという悪循環が生ずる (Sulkowski, Bauman, & Dinner, 2014)。また、貧困を背景に持つ生徒 (Rudasill, Niehaus, Crockett, Rakes, 2014) や性的マイノリティの生徒 (Joyce, 2015) も学校との結びつきが低いという。性的マイノリティの生徒は、生徒-教師関係も悪いことが指摘されており、いじめにあっている生徒と同様、大人との関係と学校との結びつきは連動しやすいといえるだろう。すなわち、大人との関係が良好でないということは大きなリスクと

なる。このことは、教師の生徒に対する見方にも表れる。生徒と教師の潜在的教育的達成に関する合意について検討した Mahatmya, Lohman, & Brown (2016) は、教師が生徒に対して、生徒がとらえているよりも学校との結びつきを低いとみているときは、より教育的達成の見方も低いとみていることを示している。大人が子どもをどのようにみるのか、大人がどのように子どもの SOS を受け止めるかということが、子ども自身の学校との結びつきに大きく影響を与える。そしてこのことは子どものサポートの認知にも影響するだろう。

家族関係においても同様である。Murphy & McKenzie (2016) は、家族機能と学校との結びつきの関連から、レジリエンスを育む上でも弱い家族機能の子どもに学校との結びつきを強化するとよいことを示唆している。家族との関係においてリスクを有する生徒にとっては、学校との結びつきの重要性がより高まるのである。そして、学校との結びつきが低い生徒は学校から引きこもりやすく、このことはその後続く危険な結果へとつながっていく (Gowing & Jackson, 2016)。Tieken, San Antonio (2016) によると、学校との結びつきが高いと、その地域からの人口流出がしにくいという。学校に愛着を持つこと、学校に価値が置かれることは、その後の地域への結びつきにも影響を与える可能性があるということである。

5) プログラムの効果

このように、学校との結びつきは生徒の適応と関連し、様々なリスクから生徒を保護し、学校卒業後の予後にも影響しうる重要な視点となる。そのため、学校との結びつきを向上させるためのプログラムも模索され、実施されている。既存のプログラムを実施して、その効果測定として学校との結びつきを用いたものが、Coyne-Foresi (2015) の Wiz Kids プログラムや、Mann, Smith, & Kristjansson (2015) の REAL GIRL プログラム

である。Wiz Kids プログラムは、スクール(サポート)カウンセラーがファシリテートする学校内でのメンタリングプログラムであり、学校との結びつきを高めることが期待されている。Coyne-Foresi (2015) は24組の親子とその担任8名を対象にこのプログラムを実施し、メンター、メンティーいずれにとっても、学校との結びつきに肯定的変化があったことを示している。もう一つのREAL GIRL プログラムは、学校と人生において成果を得られるようにするために、中学校で学業不振、問題行動、無断欠席のある女子生徒のレジリエンス、特に学問的自己効力感、学校との結びつきを高めることを狙って実施される。このプログラムの実施により、学校との結びつきを高めることが可能であるというエビデンスが得られている。既存のプログラムではないが、Kraus & Cleveland (2016) の学校リーダーと大学の協働によるメンタープログラムでも、メンティーの学校との結びつきが増加したという結果が得られている。教師の協同が生徒の学校との結びつきに影響するということはHenning Loeb (2016) でも指摘されており、周囲の働きかけによって生徒の学校との結びつきが左右するということが言えるだろう。Nitza & Dobias (2015) も、高校への移行を改善し結びつきを高めるには、学校内での関係発展のプログラムが求められるとしている。また、こうしたプログラムは、生徒主導のもので学校との結びつきが維持しやすく、仲間関係にも影響を与える(Connolly et al., 2015)。生徒主導ということは、生徒が主体となってプログラムに関与しているということであり、学校との結びつきの中でもコミットメントにかかわる部分だと考えることができる。

さらに特徴的なのは、学校との結びつきを高める実践の中に、食をめぐる実践が見られることである。Neely, Walton, & Stephens (2015, 2016) では、ヘルスプロモーションの枠組みの中で、食の実践(food practice)や、共有された昼食(shared

lunches) を行うことが学校との結びつきを高めるということを実証している。そのメカニズムとなる鍵は、共通の人間性を見ること、非公式な状況を生み出すこと、共有を促すこと、統合的参加を可能にすること、共同の利益のための犠牲を示すこと、多様性の経験を容易にすることであるという。学校における食をめぐる時間は、子どもたちにとってインフォーマルな場であり、そこでは様々な社会的相互作用が生ずる。そのため、そこでの体験が学校における安心感や学校が好きという感覚に影響を与えやすいものと推察される。学校との結びつきを高める際には、インフォーマルな時間にも目を向けることが重要となる。

こうしたプログラムを含め、学校との結びつきを高めることに資する取り組みについてのレビューも行われている。Stewart (2014) は、レジリエンスを育てる鍵を同定するため、健康促進学校(Health Promoting School)プロジェクトについてレビューをしている。その中で、「レジリエントな子どもとコミュニティ」プロジェクトを中心にみたところ、自尊感情などだけでなく、学校との結びつきも向上しており、学校コミュニティ全体に影響があったことを示している。レジリエンスを育てることが学校との結びつきを高めることにも通ずるということである。また、学校内での効果的な教育支援につなげるための健康関連領域に関するレビューも行われている(Thomas & Aggleton, 2016)。学校との結びつきは、この中で包括的學校アプローチ(whole school approach)を支持するエビデンスとして用いられている。

IV まとめ

1. 学校メンタルヘルス支援における学校へのポジティブな思いの重要性

「School connectedness」という概念が流布してきた背景には、Add HealthやHBSCといった国家的な大規模研究プロジェクトがある。世界的に、学校へのポジティブな思いをとらえることの

重要性が認識されているということである。近年では、これらの大規模プロジェクトを参照し、経年変化を見たり、対象による影響や効果の違いについて検討したりするなど、より精緻化された研究が行われてきた。未だ「School connectedness」を表す言葉や定義に統一した見解はないものの、「School connectedness」はコミットメント、アタッチメント、サポート認知の3つの側面を持つことがうかがえた。子どもが学校に対してポジティブな思いを持っているかどうかは、この3つの側面からとらえられると考えられる。

そして、この中で、学校との結びつきがメンタルヘルスに良好な影響をもたらし、メンタルヘルスが良好であることがまた結びつきを維持するという相乗効果が生じる。学校へのポジティブな思いに着目することが、学校メンタルヘルスによる循環を生み出す可能性があるということである。日本においても、学校との結びつきに着目したアプローチを行うことによってこの循環が広がっていくことが考えられる。

2. School connectedness の役割

本稿で見てきた通り、「School connectedness」は過去の課題からの回復への寄与、現在の充実、将来への肯定的影響というすべての時間軸において重要な意味を持つ。「School connectedness」を高めるといえることは、メンタルヘルスの底上げの役割があるといえるだろう。この中で、アプローチにより有効な時期や対象があることが明らかとなった。

学年を経るにつれ学校との結びつきは低下していくこと、性差が見られること、リスクのある生徒ほど学校との結びつきを維持することが重要であることなどを勘案すると、特に、入学時の最初の時期に学校との結びつきを高めるプログラムを導入することや、性差も踏まえ、リスクのある生徒に早めに働きかけることなどが、その後のメンタルヘルス維持に寄与するといえるだろう。また、

学業面における成功と学校との結びつきとの関連は強いものの、食事などのインフォーマルな場や課外活動も影響を与えることが明らかとなった。学業以外での成功など、自己有能感を感じられる様々な活動や場面も考慮に入れることが学校との結びつきに対する理解をより深める可能性がある。特に、生徒主体のプログラムやメンタリングプログラムの有効性が挙げられたため、学校において複数の学年がかかわる、異年齢での活動などが鍵となると考えられる。

3. 今後の展望

今回の調査対象は中学生以降が多くみられたが、学校に対するポジティブな思いは中学生以前から培われているものと考えられる。自記入式の調査の限界はあるものの、「高める」から「育てる」の発想をもって、小学校でどのように生まれ、中学校、高等学校以降へと変化していくのか、その展開についてみていくことが今後必要となってくるだろう。さらに、大人のかかわりは学校との結びつきを大きく左右する。今回、学校での大人との関係が家庭や地域に還元されていくということが示されたが、今後は、家庭や地域へのさらなる波及効果の検討も求められる。

<付記>本稿の一部は、JSPS 科研費 23330209 (代表青木紀久代) の助成を受けた。本稿の執筆にあたり、資料提供やご助言を賜りました、The Chicago School of Professional Psychology の町澤さやか先生、並びに院生の皆様に深く感謝申し上げます。

文献

- Aarø, L.E., Wold, B., Kannas, L., Rimpelä, M. (1986). Health behaviour in school-children: A WHO cross-national survey. *Health Promotion International*, 1(1), 17-33.
- Aldridge, J. M., Fraser, B. J., Fozdar, F., Ala'i, K., Earnest, J., & Afari, E. (2016). Students' perceptions of school climate as determinants of

- wellbeing, resilience and identity. *Improving Schools*, 19(1), 5-26.
- Bersamin, M., Garbers, S., Gaarde, J., & Santelli, J. (2016). Assessing the impact of School-based Health Centers on academic achievement and college preparation efforts: Using propensity score matching to assess school-level data in California. *Journal of School Nursing*, 32(4), 241-245.
- Booth, M. Z., & Gerard, J. M. (2014). Adolescents' stage-environment fit in middle and high school: The relationship between students' perceptions of their schools and themselves. *Youth & Society*, 46(6), 735-755.
- Bradshaw, C. P., Waasdorp, T. E., Debnam, K. J., & Johnson, S. L. (2014). Measuring school climate in high schools: A focus on safety, engagement, and the environment. *Journal of School Health*, 84(9), 593-604.
- Chapman, R. L., Buckley, L., & Sheehan, M. (2013). School-based programs for increasing connectedness and reducing risk behavior: A systematic review. *Educational Psychological Review*, 25, 95-114.
- Chung-Do, J. J., Goebert, D. A., Chang, J. Y., & Hamagami, F. (2015). Developing a comprehensive school connectedness scale for program evaluation. *Journal of School Health*, 85(3), 179-188.
- Connolly, J., Josephson, W., Schnoll, J., Simkins-Strong, E., Pepler, D., MacPherson, A., Weiser, J., Moran, M., Jiang, D. (2015). Evaluation of a Youth-Led program for preventing bullying, sexual harassment, and dating aggression in middle schools. *Journal of Early Adolescence*, 35(3), 403-434
- Coyne-Foresi, M. (2015). Wiz Kidz: Fostering school connectedness through an in-school student mentoring program. *Professional School Counseling*, 19(1), 68-79.
- Furlong, M., Sharkey, J., Quirk, M., & Dowdy, E. (2011). Exploring the protective and promotive effects of school connectedness on the relation between psychological health risk and problem behaviors/experiences. *Journal of Educational and Developmental Psychology*, 1(1), 18-34.
- Goodenow, C. (1993). The psychological sense of school membership among adolescents: Scale development and educational correlates. *Psychology in the Schools*, 30(1), 79-90.
- Gore, J. S., Thomas, J., Jones, S., Mahoney, L., Dukes, K., & Treadway, J. (2016). Social factors that predict fear of academic success. *Educational Review*, 68(2), 155-170.
- Gowing, A., Jackson, A. C. (2016). Connecting to school: Exploring student and staff understandings of connectedness to school and the factors associated with this process. *Educational and Developmental Psychologist*, 33(1), 54-69.
- Harris, K.M., Halpern, C.T., Whitsel, E., Hussey, J., Tabor, J., Entzel, P., & Udry, J.R. (2009). The National Longitudinal Study of Adolescent to Adult Health: Research design. Retrieved from <http://www.cpc.unc.edu/projects/addhealth/design>. (May 30, 2017)
- Henning Loeb, I. (2016). Zooming in on the partnership of a successful teaching team: Examining cooperation, action and recognition. *Educational Action Research*, 24(3), 387-403.
- 家近 早苗 (2017). 学校心理学の展望と課題. 教育心理学年報, 56, 122-136.
- 石限 利紀 (1999). 学校心理学——教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—— 誠信書房
- Jacobson, K. C., & Rowe, D. C. (1999). Genetic and environmental influences on the relationships between family connectedness, school connectedness, and adolescent depressed mood: Sex differences. *Developmental Psychology*, 35(4), 926-39.
- Jimerson, S. R., Patterson, M. S., Stein, R., & Babcock, S. K. (2016). Understanding educational success among Latino/a English Language Learners: Factors associated with high school completion and postsecondary school attendance. *Contemporary School Psychology*, 20(4), 402-416.
- Joyce, H. D. (2015). School connectedness and student-teacher relationships: A comparison of sexual minority youths and their peers. *Children & Schools*, 37(3), 185-192.
- 門田 美恵子・吉田 浩子・大東 俊一・青木 清 (2012). 小学校第6学年児童の登校意欲に影響を与える生活実態. 心身健康科学, 8(2), 86-95.
- Karcher, M. J. (2011). The Hemingway: Measure of adolescent connectedness. Hemingway measure of adolescent connectedness website. Retrieved from <http://adolescentconnectedness.com/media/HemingwayManual2012.pdf>
- 厚生労働省 (2012). 社会的排除にいたるプロセス——若年ケース・スタディから見る排除の過程—— < <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002kvtw-att/2r9852000002kw5m.pdf> > (July 21, 2017)
- Kraus, S. E. C., & Cleveland, R. E. (2016). The effects of a cross-age peer mentoring program on school connectedness with rural populations. *Georgia School Counselors Association Journal*, 23, 26-37.
- 久能 弘道・長谷川 みどり (2001). 学校魅力を規定する諸要因の調査研究(1)——学校ストレス, ソーシャ

- ル・サポート、ストレス対処方略と不登校傾向——北海道生涯学習研究：北海道教育大学生涯学習教育研究センター紀要，創刊号，63-75.
- Langille, D. B., Asbridge, M., Azagba, S., Flowerdew, G., Rasic, D. & Cragg, A. (2014). School connectedness with adolescent sexual risk-taking in Nova Scotia, Canada. *Journal of School Health, 84*(6), 387-395.
- Langille, D.B., Rasic, D., Kisely, S., Flowerdew, G., & Cobbett, S. (2012). Protective associations of school connectedness with risk of depression in Nova Scotia adolescents. *The Canadian Journal of Psychiatry, 57*(12), 759-764.
- La Salle, T. P., Parris, L., Morin, M., & Meyers, J. (2016). Deconstructing peer victimization: relationships with connectedness, gender, grade, and race/ethnicity. *School Psychology Forum, 10*(1), 41-54.
- Libbey, H.P. (2004). Measuring student relationships to school: Attachment, bonding, connectedness, and engagement. *Journal of School Health, 74*(7), 274-283.
- Loukas, A., Cance, J. D., & Batanova, M. (2016). Trajectories of school connectedness across the middle school years: Examining the roles of adolescents' internalizing and externalizing problems. *Youth & Society, 48*(4), 557-576.
- Loukas, A., Pasch, K. E. (2013). Does school connectedness buffer the impact of peer victimization on early adolescents' subsequent adjustment problems? *Journal of Early Adolescence, 33*(2), 245-266.
- McNeely, C. A., Nonnemaker, J. M., & Blum, R. W. (2002). Promoting school connectedness: Evidence from the National Longitudinal Study of Adolescent Health. *Journal of School Health, 72*(4), 138-146.
- Mahatmya, D., Lohman, B. J., Brown, E. L., & Conway-Turner, J. (2016). The role of race and teachers' cultural awareness in predicting low-income, Black and Hispanic students' perceptions of educational attainment. *Social Psychology of Education: An International Journal, 19*(2), 427-449.
- Mann, M. J., Smith, M. L., & Kristjansson, A. L. (2015). Improving academic self-efficacy, school connectedness, and identity in struggling middle school girls: A preliminary study of the "REAL Girls" program. *Health Education & Behavior, 42*(1), 117-126.
- Martinez, A., Coker, C., McMahon, S. D., Cohen, J., & Thapa, A. (2016). Involvement in extracurricular activities: Identifying differences in perceptions of school climate. *Educational and Developmental Psychologist, 33*(1), 70-84.
- Millings, A., Buck, R., Montgomery, A., Spears, M. & Stallard, P. (2012). School connectedness, peer attachment, and self-esteem as predictors of adolescent depression. *Journal of Adolescence, 35*(4), 1061-1067.
- 文部科学省 (2015). チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申) (中教審第185号) <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyochukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf> (July 21, 2017)
- 文部科学省 (2017). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/02/_icsFiles/afieldfile/2017/02/28/1382696_001_1.pdf> (July 21, 2017)
- Murnaghan, D., Morrison, W., Laurence, C., & Bell, B. (2014). Investigating mental fitness and school connectedness in Prince Edward Island and New Brunswick, Canada. *Journal of School Health, 84*(7), 444-450.
- Murphy, E. L., & McKenzie, V. L. (2016). The impact of family functioning and school connectedness on preadolescent sense of mastery. *Journal of Psychologists and Counsellors in Schools, 26*(1), 35-51.
- 内閣府 (2014). 子供の貧困対策に関する大綱 <<http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/pdf/taikou.pdf>> (July 28, 2017)
- Nearchou, F. A., Stogiannidou, A., & Kiosseoglou, G. (2014). Adaptation and psychometric evaluation of a resilience measure in Greek elementary school students. *Psychology in the Schools, 51*(1), 58-71.
- Neely, E., Walton, M., & Stephens, C. (2015). Building school connectedness through shared lunches. *Health Education, 115*(6), 554-569.
- Neely, E., Walton, M., & Stephens, C. (2016). Food practices and school connectedness: A whole-school approach. *Health Education, 116*(3), 320-340.
- Nitza, A., Dobias, B. (2015). Connectedness is key: The evolution of a process-driven high school program. *Perspectives in Peer Programs, 26*(1), 33-44.
- Ramsey, C. M., Spira, A. P., Parisi, J. M., & Rebok, G. W. (2016). School climate: Perceptual differences between students, parents, and school staff. *School Effectiveness and School Improvement, 27*(4), 629-641.
- Renshaw, T. L. (2015). A replication of the technical adequacy of the Student Subjective Wellbeing Questionnaire. *Journal of Psychoeducational Assessment, 33*(8), 757-768.
- Renshaw, T. L., Long, A. C. J., & Cook, C. R. Assessing adolescents' positive psychological functioning at school: Development and validation of the Student Subjective Wellbeing

- Questionnaire. *School Psychology Quarterly*, 30(4), 534-552.
- Rudasill, K. M., Niehaus, K., Crockett, L. J., & Rakes, C. R. (2014). Changes in school connectedness and deviant peer affiliation among sixth-grade students from high-poverty neighborhoods. *Journal of Early Adolescence*, 34(7), 896-922.
- Schwerdtfeger Gallus, K. L., Shreffler, K. M., Merten, M. J., & Cox, R. B., Jr. (2015). Interpersonal trauma and depressive symptoms in early adolescents: Exploring the moderating roles of parent and school connectedness. *Journal of Early Adolescence*, 37(7), 990-1013.
- Shochet, I. M., & Smith, C. L. (2014). A Prospective study investigating the links among classroom environment, school connectedness, and depressive symptoms in adolescents. *Psychology in the Schools*, 51(5), 480-492.
- Stewart, D. (2014). Resilience: An entry point for African health promoting schools? *Health Education*, 114(3), 197-207.
- Sulkowski, M. L., Bauman, S. A., Dinner, S., Nixon, C. Davis., & Stan, D. (2014). An investigation into how students respond to being victimized by peer aggression.. *Journal of School Violence*, 13(4), 339-358.
- Thomas, F., & Aggleton, P. (2016). A confluence of evidence: What lies behind a "Whole School" approach to health education in schools? *Health Education*, 116(2), 154-176.
- Tieken, M. C. & San Antonio, D. M. (2016). Rural aspirations, rural futures: From "problem" to possibility. *Peabody Journal of Education*, 91(2), 131-136.
- Tighezza, M. (2014). Modeling relationships among learning, attitude, self-Perception, and science achievement for grade 8 Saudi students. *International Journal of Science and Mathematics Education*, 12(4), 721-740.
- Van Gundy, K. T., Rebellon, C. J., Jaffee, E. M., Stracuzzi, N. F., Sharp, E. H., & Tucker, C. J. (2016). Perceived local job prospects and school connectedness in a struggling rural economy: A life-course perspective. *Peabody Journal of Education*, 91(2), 224-245.
- Waters, S., Cross, D., & Shaw, T. (2010). Does the nature of schools matter? An exploration of selected school ecology factors on adolescent perceptions of school connectedness. *British journal of Educational Psychology*, 80, 381-402.